

歴史に学ぶ

ロシアによるウクライナへの武力侵攻から、日本はどのような教訓を得られたのでしょうか。

多くの識者が挙げているのは、主として、(1) 自衛力の重要性、(2) 安全保障を確保する枠組みである同盟の存在の重要性、(3) 核抑止力の信頼性、(4) 政治リーダーの危機対応力と統率力です。

ウクライナ情勢が今後どのような展開となっていくのか、予測がつかない状況ですが、日本の永年の悲願でもあった「北方領土の返還」の期待は、幻想に過ぎないものでないのかと改めて感じさせられたところです。

そして、対ロシア（ソ連）との関係において、「良き教材」を過去に有していたはずなのに、何故日本は「歴史に学ぶ」ことができなかったのか、残念に思わざるを得ません。

その好例として挙げられるのが、今日の日本の「国のかたち」を守った「占守（シュムシュ）島の戦い」です。この戦闘がなければ、日本はドイツや朝鮮半島のような分断国家になっていたといわれます。

昭和20年8月15日、天皇の「聖断」（玉音放送）によって戦争は終わり、「戦後」が始まったはずなのが、千島列島の先端にある国境の小さな島（占守島）では、（あろうことか）これから戦争が始まろうとしていたのです。満州におけるソ連軍は、日ソ中立条約を一方的に破って8月7日に攻め入り、戦闘はそのまま終戦後も続いたが、終戦の二日後の8月17日、連合国の一員として“勝者の分け前”にあずかろうと、スターリンのソ連軍は千島の占守島に侵攻してきたのです。しかし、北方の小さなこの島には（おそらく太平洋戦史上でみても超強力な軍隊）戦車部隊が、奇跡的にも温存されていたのでした。（日ソ中立条約を妄信した）日本陸軍は、千島列島伝いに米軍が日本本土を目指してくるはずと、当該部隊を満州から占守島に移動させていたのです。その後の戦局は沖縄方面に移ったため、無用となるも運搬手段が断たれてしまい、置き去り状態となった。しかしこの部隊の戦意はすこぶる高く、勇猛果敢な防戦による（米軍による北海道進駐までの）時間稼ぎがなかったら、今頃北海道や東北地方はロシア領となっていたかもしれない、とまで言われているのです。この歴史的事実を浅田次郎の『終わらざる夏』（集英社文庫、上中下巻）は、感動の反戦小説に仕上げています。…戦争が終わるとき、戦争が始まる。この大いなる矛盾が、戦う兵、死にゆく兵たちを巻き込んで炸裂（さくれつ）するとき、戦争の禍々（まがまが）しさと非情さ、そして愚かさが胸を打つ…辺境の島の精鋭部隊に配属される3人の臨時召集の補充兵を中心に、彼らの妻や子供、母親や縁者、教師や友人たちの運命を重層的に描いていく。…それにしても、いちばん人の命を守らなかったのは「国」である。…しかし、「国」はあまりにも国民の命を安く見積もってきた。

ところで、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とは、ドイツの鉄血宰相・ビスマルクの格言ですが、「愚者」は自分で失敗して初めて失敗の原因に気づき、経験したことからしか学べない。「賢者」は歴史を学ぶことで多くの経験を身につけることができる。…私達も、現在の国内外の難局を「歴史に学ぶ」ことで対応できないでしょうか…

